

看護学臨地実習指導の導入における初年度の取り組み

The first year report on the introduction of teaching system of clinical nursing practice for students

東8階病棟 ○草間恵里 小平いずみ 寺岡亜記 三井貞代

《要旨》

臨地実習指導者を導入した初年度の活動をまとめ、要点をしぼって実習を振り返った。一スタッフが継続して勤務し指導を行うことは、学生指導において有効なフィードバックを行えるとともに、スタッフとも関係を築きやすく、学生を受け入れる病棟の雰囲気作りにおいても効果的であると考えられた。また、指導者同士で相談・サポートできることから、複数体制がよいと考えられた。

《キーワード》

看護学生、臨地実習指導、活動報告

I. はじめに

当病棟では学生実習は以前から受け入れていたものの、実習期間中に継続した指導者はいなかった。今年度より、院内のモデル病棟に選ばれたこともあり、新たに臨地実習指導者をおくこととなった。しかし、当病棟においては前例がなく指導担当者として悩むことや不安に感じる事が多くあった。そこで、今年度の学生実習における指導をまとめ、今後の臨床指導に生かされるかと考え、ここに報告する。

II. 倫理的配慮

まとめる際に、個人が特定されないように配慮した。

III. 実習の内容

1) 実習領域：老年看護。

2) 実習目的：老年期にある対象の特徴と病院および施設における高齢者の生活を理解し、加齢に伴う変化に応じた看護、健康障害をもつ高齢者とその家族に対する看護について学習する。

2) 期間と学生人数：1グループ（以下Gとする）10/3～13 7名

2G) 10/31~11/10 7名

3G) 11/28~12/8 6名

3) 指導担当者：経験年数6年目3名、各グループに1名ずつ担当。

4) 事前準備：教員と打ち合わせをし下記2点を決定し、実習の目的や内容を確認した。

- ・ 患者は65歳以上で実習期間中入院している人であること。
- ・ 自分が所属しているチームの患者を受け持つ学生は臨床指導者が、他チームの患者を受け持つ学生は教員が担当して指導すること。

5) 実習中：1週目一火曜<指導者>患者選択と依頼。

火曜<指導者>病棟オリエンテーション、患者紹介、情報収集の支援。

<学生>病棟オリエンテーション、情報収集。

水曜<指導者>情報収集の支援、看護展開のアドバイス。

<学生>環境整備、情報収集、ケア見学。

木曜<指導者>看護展開の指導、ケアの指導。

<学生>情報収集、ケア参加。

金曜<指導者>ケアの指導、看護展開の指導。

<学生>ケア参加、看護問題の抽出。

2週目一火曜~木曜<指導者>看護展開の指導、計画評価修正の指導、ケア技術指導。

<学生>ケアの実施、計画の評価修正。

金曜<指導者><学生>カンファレンス。

・実習中に学生が行う主な看護技術

食事介助、排泄介助、移動介助、清潔介助、浣腸、血糖測定、インスリン注射、点滴カクテル、点滴管理、

皮下・筋肉注射、搬送、吸引など

III. 実習の実際

1) 指導者一患者間

- ・ 実際には実習開始の前日より早めに患者選択と依頼を行っていたが、実習の開始後に患者から拒否されることがあり、当日まで患者決定できないことがあった。
- ・ 実習中には、看護実習の目的を理解していない患者と学生との間にトラブルがおきることもあった。

2) 指導者－学生間

- ・ 1グループでは、指導者が担当学生を中心の指導したため、関わりの少ない学生から寂しかったとの感想が聞かれ、最終日に全学生に手紙を渡すことがあった。
- ・ 2グループ以降は担当に関わらず全学生に声をかけたり、指導をするなどコミュニケーションを図った。

3) 指導者－スタッフ間

- ・ 1、2グループの指導者は通常の業務を兼任したため学生指導に時間を有し、他スタッフや業務に影響が出ることもあった。
- ・ 3グループは、できるだけフリー業務に勤務を調整して、指導を行った。
- ・ スタッフへは病棟会や連絡帳にて実習方法の説明をし、協力を依頼した。
- ・ 学生が受け持つ患者の、日々の担当者には、その学生の指導要点などを伝え、円滑に指導してもらえるよう調整を図った。

4) 指導者間

- ・ 実習終了するごとに、指導者同士で困ったことなどを話し合い、改善点を考え、次の実習に生かした。
- ・ 実習ごとでは指導者3名で、患者選択などで協力した。

IV. 考察

患者から実習を拒否されたことは老年期の特性が要因であって、実習を始める以前に老年看護の特性を考慮して関わるべきであった。各看護領域によって特性は変化するため、臨地実習指導者も十分に勉強しておく必要があると考える。

看護学生の学習支援にとって、看護師から努力を認めることなど肯定的なフィードバックを行うことが大切だと言われており、実習コメントを通した肯定的な評価や、日々の言葉がけが重要になってくる。そのことから実習期間を継続して指導することは、学生の変化にも早くから気付いて効果的なフィードバックにつながると思われる。

学生が実習しやすい病棟とは、スタッフが受け入れる態度であることが大きな要因と言われていきます。臨地実習指導者がスタッフであることから、指導者とスタッフ間で学生に関する情報共有が容易になり、実習しやすい雰囲気を作られると考えられる。

しかし、実習期間中を継続して勤務することから、勤務調整が必要であり周囲の理解やサポートも必要になる。また、慣れない学生指導に指導者は身体的・精神的な負担も大きく、相談や協力し合えるため複数の指導体制がよいと考えられる。

V. 課題

今回は臨地実習指導者からの活動の振り返りであったが、今後は患者・学生・スタッフの意見を聞き、実習に関わる全員が満足できるように改善していきたい。更に、学校・病院との良い連携がとれたと思う。

VI. 参考文献

等々力菜美：臨地実習で学生の学びに影響する看護師の行動、第36回看護教育，P275～277，

2005